

# たぐみ

## Craftsmanship

特集 人間国宝 芹沢銈介展

第23号

### アジアへの窓口 九州国立博物館のこと

言論の自由と民主化を広く訴えるとして、イスラム教の宗祖ムハンマドの風刺画をデンマークの新聞が掲載し、さらに欧州の数誌が転載したことで、イスラム諸国の猛反発をかつていっくら風刺や批判が自由だといっても、アッラーの神や宗祖をはじめいつさいの偶像崇拜を厳禁しているイスラムの諸国と人びとにとって、これほどの侮辱はないであろう。

国や民族の、歴史や文化の相互理解ということとは、今なおかくも難しいのである。歴史教科書問題も含め、どの国も国権第一主義を捨て、相互主義の立場で交流しない限り、世界の平和と共生はあり得ないであろう。

そのような視点から、日本人の源流とその文化を、アジアの諸民族との永い交流の歴史の中で捉えようと試みた博物館が昨年十月に誕生した。福岡県

太宰府の九州国立博物館である。

この館は、「海の道、アジアの路」と題した文化交流室を常設展示館とし、日本を東端として中、韓などの東北アジア、東南アジア、南アジア、さらにイランなどの西アジアに至る広大な地域を、古代からの交流と、多様性をもつた共生の巨大な集合体としてみる。

とりわけユニークなのは、国立博物館としては初めての個人による寄贈室「金子量重記念室」である。金子氏は衣食住、信仰、芸能、生産などの生活文化を民族の根源を表すものとして、これに民族造形の名を与えた。そして永年にわたる蒐集品の中から、六六二点を選び寄贈したのであった。それらはアジアの諸民族の衣服や食器、信仰や物造りのための道具など多岐に及ぶ。九州博の冊子「アジアージュ」は記している。「これらはすべて代々受け継がれたもの。そこに優劣などない。あるのは、民族の誇りであり、莫知なのである。」

(志賀直邦)

たくみ企画展

## 人間国宝 芹沢銈介展

会 期 平成十八年三月二十五日(土)～四月一日(土)  
三月二十六日(日)は営業いたしません。

会 場 たくみ二階ギャラリー

営業時間 十一時から七時まで(日曜日・最終日は五時半まで)

出品品目

屏風(のれん雛型図・極楽から来た図)、法然上人絵伝(額装)、仏画、梵字、物語絵、カルタ絵、文字絵、うちわ絵、肉筆画 ほか

### 併催 民藝運動の巨匠・小品展

作家

柳宗悦、バーナード・リーチ、濱田庄司、富本憲吉、棟方志功、河井武一、金城次郎ほか

「民藝運動における巨匠」とは、柳、河井、濱田先生たちを中心とする初期から中期までの作家たちの、共に語り合い、行動し、切磋琢磨した、そして熱い友情と信頼に結ばれた同志的集団をいう、と私たちは理解しています。

今回は芹沢銈介作品を中心に、初出のものも含め展観いたします。



のれん雛型図屏風 504,000 円



梵字 軸装 一八九、〇〇〇円



和紙譜 型染絵 六三〇、〇〇〇円



いろは模様 型染絵 二六一、五〇〇円



法然上人御影 軸装 一五七、五〇〇円



極楽から来た図 軸装 一〇五、〇〇〇円

「アジア民族造形ネットワークシステム」の創設と展開(一)

## 生活文化こそ民族の英知と力

金子 量重

偉大な歴史と生活文化を築き、

日本の基層文化を育んだアジア

韓国ドラマの「チャングムの誓い」

が、ヨンさまやチエジュの恋愛劇に劣らぬ高い視聴率を得ている。朝鮮王朝時代尊い命を守ろうと「衣食同源」の理を信じて、ひたむきに料理に努める若い女官の物語には、韓民族の生活信条や暮らしが、みごとに描かれているからであろう。政治外交面でギクシャクする日韓だが、国民の韓文化による敏感な反応はゆとりある心の表れか。二十年來日本人のアジアへの旅は着実な伸びを示した。欧米一辺倒の教師が知らないアジアを、学生たちは足と目で実感している。国民のアジア認識にくらべると、政治家や官僚たちの「アジア識らず」のひどさに、私は日本の未来に大きな不安を感じた。世

界六十億のうちアジアには四十億近くの諸民族が住み、国際情勢に照らしても「二十一世紀はアジアの時代」なのだ。アジア認識を怠った失政が、今政治や外交上重大な局面を迎えているが、韓国と中国だけと思ってはならない。東南アジアやインドやイスラム諸

国もアジアの重要な地域であり、人材や知的資源も豊富で日本には欠き得ないだけに、友好を深める好機だ。政府にはアジア認識を深める教育理念や、確たるアジア外交政策があるとは思えない。「アジア識らず」でいる日本の未来を案じて、私は四〇年前韓国を振り出しにアジアへの旅を始めた。

「アンニョン・ハシムニカ」と

「今日は」

首都ソウルには景福宮など、朝鮮王朝時代の王宮が優雅な姿をとどめてい

る。女性たちが色鮮やかな民族服チマ・チヨゴリを、風になびかせて歩く姿はこの国の風物詩だ。着物とは色や形が大きく異なる。祖形は古代ペルシアの胡服に求められよう。奈良の乙女たちが愛でた呉服もこの流れを汲むものだろう。日本女性は平安時代になると、十二単に着替えて和風化をはじめた。だが韓国女性は流行を変えながら千二百年着続けている。

裏通りを歩くと瓦や藁葺きの家が立ちならび、造作や間取りや家具の形も日本とはまったく違う。彼らは相手の身を感じて「アンニョン(安寧)・ハシムニカ」と挨拶する。今は死語となったが、かつてはこの言葉の前についたという。まさにいつ襲われるかわからない状況をさす表現なのだ。「今日は」と晴雨を気にする天候の挨拶を交わす日本人は、大地に定着して生きてきた農耕民。彼らは危険が伴う砂漠を移動する騎馬遊牧民の血が流れてい



天下総図 (韓国 朝鮮王朝)

ると感じた。

私は殺人や企業犯罪が日常化した、極悪な日本の社会状況に照らせば、韓国の挨拶のほうがあざわしいのではないかと思つた。なにしろ日本人は緊張感に欠け、民官ともに自己防衛意識が低すぎる。狡猾な北鮮に操られた拉致は象徴的な事件だが、日本人の周辺地

域への警戒心のなさに起因しよう。

”ものは民族の精神性や

生活文化の香りの象徴

街を歩けば辻ではジョツテ(尺八風の竹笛)を演奏し、パンソリ(語り節)に喉をうならせる芸人にしばしば聞き惚れる。間口二間ほどの食堂や店が軒を連ね、アワビ、南瓜、五種を入れた

朝粥は絶品で医薬同源を実感する。ブルコギ(焼肉)やサンゲタン(参鶏湯)を食べたが、オアシスでのシシカバブに通じる遊牧系の肉料理だ。米、コチュジャンなどの調味料、木漆、金工品、石鍋、籠、ござ、屏風、韓服などが売られている。

仁寺洞(ソウルの骨董街)では、頑丈な金具のついた家具、ジャンやパンダチや四方卓子は見ごたえ十分。伊達政宗はこれらを見て、木匠や甲冑師に命じて仙台筆筒を造らせたという。

古書店では朝鮮時代の木版刷りの儒教書「五倫行実書」、「三綱行実書」や大形の古地図を棚から見つけて購入。地図は「天下総図」(世界地図)や「朝鮮八道図」に加え、日本や琉球、中国も含まれる。日本は韓国側から見た地図で、日本海が手前になった珍品。今なお盛んな相手との相性を見る、占い師が描いた絵入の占書「唐四柱」は楽しい本だ。また巫堂が死者の口寄せ祈祷の折に、大岩に張る「七星」(チルソン)の

神像画も見つけた。紙縄(シジャン)古書から造ったこよりの多彩な容器など、今までに見たことのないものとの巡り合いだった。彼らは流暢な日本語で話しかけてくるが、一昔前の乱れのない日本語なのに驚かされた。

秋の「キムジャン」の季節ともなれば、各家庭では、白いチマ・チヨゴリを着た祖母や母は、娘への躰を兼ね栄養源のキムチ造りに余念がない。キムチの具には果物や魚介類を入れるので味はじつに多様だ。それを漬けて台所の裏手の醬甕台(チャンドクテ)に並べる大甕は、オンドルの練炭灰の釉をかけた指で模様を描いた堂々たる形。まさに韓民族の匠の技の象徴だ。東大門の忘憂里にある二〇〇年ほど前からの窯は、幅一〇メートル、高さ三メートル、長さ八〇メートルの半地下式のトンネル窯だった。葉煎子や酒煎子という名の土瓶を求めたが、日本とはまったく違う形の逸品だった。この製品を見ただけでも、韓民族の民族造形との関わり

の深さが感じられた。日本人は韓族から多くの影響を受けたが、模倣にとどまらず、自分たちの生活信条や民族性や好みを反映して造形したことが窺える。

### ”ナラ”を拓いた韓族の匠

私が受けた韓国の歴史や文化といえ、百済王による仏教の伝来にもない、新羅、伽耶、高句麗からも多くの人々が渡来したこと、新しい国造りにわが古代人は、安らぎある靈性豊かな大和盆地を選び、韓族の匠が宮殿や堂塔を建てたことから、「ナラ」(古代韓国語で都の意)の地名が生まれる。さらに遺跡の発掘報告など、なぜか古代に限定されたのは、戦後の歴史教育がいたずらに神話や伝統文化を軽視して、考古学に偏りすぎたからではなからうか。現代を含み各時代に生きた人々の生活相を、平等に教える努力が必要だった。

を代表する多くの知性と出会い、長い交流を保つことは最高の収穫であった。朝鮮時代に築かれ連綿とつづく、民族の優れた英知の賜物である匠の造形活動や、それをういての韓民族の生活文化の高さについては、わが公教育の場にはまったく登場しなかった。悲しい植民地支配時代なればこそ、丁寧に真実を教えかれらの誇りを傷つけるべきではなかった。「国際化時代」を声高に叫ぶ今日、わが教育は欧米への偏りから脱し、まず周辺のアジア認識の高揚を図らなければ、教育はもとより政治、外交、交易、報道も目的を果たせまい。韓民族の心情と暮らしに接した経験は、私の世界観や、価値観を根本的に変えたばかりか、知的な栄養素となつて脳裏を激しく揺さぶった。一国ですらこれだけの収穫が得られた。胸には熱い血潮がたぎり、「よし、アジアを歩こう」という思いに体が大きく躍動しはじめた。(つづく)

親友の郭少普(韓国著作権センター社長)、芮庸海(韓国文化財専門審議会委員長)、李大源(弘益大学総長)、金元龍(国立中央博物館長)をはじめ、各界

(アジア民族造形文化研究所長)

## 香辛料

### 「たらの芽通信」

瀧田 項一

きょう、阡朗さんから「たらの芽通信」が届いた。年にいち二度の節々の便りである。短いが中身の詰まった通信であるから、いつしか、そろそろ届く頃あいかと待ち望んでいるようになった。

よくしたものでボクの口の中に残る香辛料の効き目が、やや薄らいだころに、このデータメ通信が届くのである。いつもボクはこの「たらの芽通信」をデータメと読み違えるので、決して悪気はない。ご勘弁の程、「穂の芽」とは難しい漢字である。

ともあれ、そこには阡朗氏の深遠なる人生観であり、世相の嘆きであったり、モノを凝視める視線の高さであったり、短いが彼のはく正論の詰まった

essay)である。

その都度ボクは強烈なスパイスに犯されるのである。

惟るに、モノ作りの中で、いまやこの阡朗さんぐらいの哲学を奥底に秘めた工人は何人いるだろうかと、ボク

## 美学

老境に仲間入りしたつもりは無いのだが、涙もろくなつた。

フランダーズの犬、ラストシーンがよくない。一途に努力する青少年達も困る。「故郷」は喉に何か詰まる。アメーzingグ・グレースはアイリッシュユの人々の歴史が浮かんでだめだ。

今、此の日本を思うとき、言葉が見つからないほど狼狽する。教育、礼節、驕、誇り、責任感、感謝。国敗れて、山河もやぶれ、人が壊れるのか。

は常に敬服しているのである。

此の度の「たらの芽通信」は多くの人々に、器を作る人に、又それを求めて用いる人に読んで戴きたく「たくみ通信」の行間に差し挟んでもらいたく勝手に願うのである。(陶芸家)

四季に応じた衣、「色、織、柄」食、「調理、器、祈り」住、「自然と調和したたたずまい」、は今日までつなげて呉れた、数知れない名も無い尊き人々の底力が伝統となつて伝えられてきた。意識をもつて耕せると思つていた私の間違つていた。人間の持てる機能を甘やかす近代化を選んだ。伝統を壊す思ひ上がりは奇を銜う、次代に活かす為にある。

魂の共感を目指して残りを歩く。大志を抱く青年たちを信じて。皆様の健康を祈つて年頭の挨拶いたします。

佐藤阡朗

## 柳宗悦の書簡とたくみ創業のころ(一)

志賀 直邦

たくみの並びにシンワ・オークションという美術品入札の会社があつて、なかなか盛んなようである。古書の分野では神田小川町に東京古書会館があつて、定期的に古書の入札会や即売市が開かれている。古書といつても歴史資料の古文書や書画、書簡、古地図、文学作品から漫画まであるが、昨年の初夏、「明治古典会・七夕古書大入札会」というのに参加した。

じつはその少し前、西銀座の美術商萬葉洞の〇氏から電話があつて、柳宗悦の書簡で「たくみ店の件」というのが出ているがご覧になりませんか、ということであつた。

柳宗悦は東京のたくみの創立者の中心人物だったから、たくみに関連した文章や手紙はかなりある。柳全集の書簡集にもいくつかあることは承知して

いたが、これが柳の信頼する倉敷のA氏宛のものと知つて早速下見会に出かけたのであつた。

この七夕古書大入札会は、由利公正起草、福岡孝弟加筆による「五箇条の御誓文起草稿」が高額で出品されたことと話題をよび、新聞紙上でも入札結果が報道された。ほかに芹沢銈介作の「法然上人絵伝」初版本が出品された。これは昭和十六年刊行の合羽摺り手彩色六十四図の作で、限定百部の内じつさいには一部手彩色も含め四十部しか頒布されず、多くは戦災にあい、幻といつていい作品である。

しかしまことに迂闊なことに、柳の書簡の応札に気をとられ、「法然上人絵伝」への対応を忘れ、あとでほぞを噛んだ次第であつた。

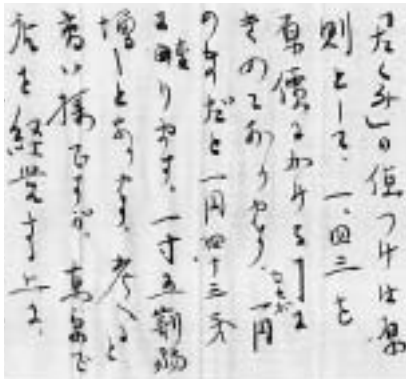
さて柳の書簡はある書店を通して落

札、数日後自宅へ送られてきた。昭和九年(一九三四年)八月二日付でA氏宛のもの、すぐに全集と照合し収録されていることを確認した。書簡の状態は本紙、封筒とも極上で、柳の筆跡も心のもつた美しい字である。

九年の八月といえば東京銀座に通称たくみ工藝店が開店(八年十二月十六日)してからちょうど七カ月半、そして九年七月十日の株式会社たくみの法人登記の三週間後である。日本民藝協会の設立はこの年の六月、日本民藝館はこのときまだ構想の段階であつた。しかし民藝運動の実局面でいえば、もっとも活動的であつた時期といつてよい。

柳は昭和八年(一九三三年)の六月から八月末にかけてハワイ大学での講演のため渡航するが、そのハワイから外村吉之介宛に一通の手紙を出している。その一部を紹介しよう。「遠くにいると、内地からの便りは一入嬉しい。小石原への探索、山陰への旅、君達の仕事等々、いい便りをうけて大変嬉し





柳宗悦の書簡（部分）

く思う。僕も帰つたら、この秋に仕事をもちと総合的にまとめ、東京に有力な店も設置したい考えている。」

さらに柳はこの年十二月の『工藝第三六号』に次のように書いています。

「今迄第一には、よき個人作家を得ることが主であり、第二段には各地に民藝を興す仕事が多されたが、今は第三段に入つてこれ等の機関としての店舗が要求されたわけである。…吾々は将来第四段として製作、販売に加うるに出版を合体し、進んで美術館や学校

等に発展し、一つの統一ある工藝組織に之を大成させたい念願である。」

このような構想のもとに、民藝運動は、柳、河井、濱田、芹沢、外村、リーチほか同人たちによつて、啓蒙、調査、製作、集荷、販売という一貫した流れの中で実践されることになった。

たくみ創業前後の詳しい事情については、柳たちの動向も含めてあらためて書くが、ここでは本題である例の柳の書簡の内容について記そう。

（前略）、越中の旅から帰り、貴兄の濱田へのお手紙を拜見致しました。小生も仲に立ち色々こまっておりますが、何しても迷惑のみかける結果となつて本意なく考えます。早速たくみにも参り、話しておきましたが、この四、五ヶ月は店の方も大試練に逢い、やつと落つきかけ、この秋頃からやや仕事らしい仕事を始めるかと存じます。重々小生も気をつけるつもり故暫らく御海容希ひ上げます。お説お尤の点多いのですが、一面聞き伝えより生

ずる思いすごしもあるかと存じ事情を多少お知らせ致します。」と前置きし、

「たくみの値つけは原則として一、四三を原価にかける事にきめております。もとが一円のものだと一円四十三銭に売ります。考へると高い様ですが、東京で店を経営をする上に、之が合理的価格だと云う事に結論されたのです。

店は百貨店及び他の小売店にも卸しますが、その際は売値の八掛け故、たくみの口銭は十四銭五厘となります。松坂屋の場合は三割とられたので、たくみの利益は僅かなものでした。」と記し、理解を求めている。

柳たち民藝同人はたくみを足場に、九年三月十二日から上野松坂屋で「日本現代民藝展覧会」を開いており、つづけて伊東屋でも会を開催したようである、その際の出品作品の返品と代金支払の遅延に対する苦情が、廻り回つて濱田や柳のもとに寄せられたのだと思う。

（つづく）

## 雛祭りとは雛人形

千葉 孝嗣

古代より、三月上旬(三月最初の巳の日)に「かたしろ」を流すという風習があった。これは、紙や草などで作った小さな人形に、自分の身の穢れを移して川や海に流すというもので、現在も各地で行われる「流し雛」の原型である。平安期の王朝では、これとは別に「ひいな遊び」といって、子どもが小さな人形やままごと道具で遊んでいたこともあり、こうした人形をめぐる



抱雛(富山県八尾)

行事・習俗が、その後の世に「雛祭り」として定着していったようである。

水に流していた「かたしろ」が家に飾る「雛人形」となり、公家や武家から一般の庶民にも広まったのは、江戸時代に入ってからとされる。簡素な紙びなが、やがて王朝時代の貴族の姿を模した立ち雛となり、さらに座り雛となつて、江戸や京では華麗な衣装雛が作られるようになった。江戸の世も落ち着いてくると、衣装雛は競って大きく、また華麗なものとなり、時には大きくなり過ぎた雛人形に対して禁令が出るといったこともあった。

江戸や京では、時代によつて「享保雛」・「古今雛」・「次郎左衛門雛」といった衣装雛が作られ、大いに流行した。現在の東京都中央区室町には、「十軒

店」という雛市が立つてにぎわったというが、ここでは道の両側に仮の板小屋を設けて店を出し、元からある店も加え四列になつて雛人形を売り出した道の中にある板小屋を「中店」といい、現在では浅草の「仲見世」にその名残を見ることが出来る。

以上のような衣装雛は、都会の武家や商家で流行したもので、今でも地方の旧家では、桃の節句の時期にもなると代々伝わる雛飾りを一般公開してくれる家もある。

その一方で、衣装雛を買うことのできない田舎の家などでは、土などで作った簡素な雛人形を飾った。素焼きの後に胡粉や泥絵具で彩色した土人形は、製法が簡単な上に人形に対する需要も多かったから、全国各地に広まった。地域によつては、雛人形といつても男雛・女雛のみならず、天神や福神、女性や子どもの姿を写したものの、動物なども雛壇に飾られた。土人形を作る



雛人形段飾り(秋田県横手中山人形)

家の屋号が「ひなや」というものであったところも多い。このようにして、雛人形は江戸時代後半から明治のはじめ頃までには、全国各地に広まったのである。

ところで、男雛と女雛を飾る際に、どちら側にもどちらを飾るのかということが時折話題になる。江戸から明治時

代にかけての書かれた雛人形の絵や、あるいは現在も旧家などでは、男雛を左（向かって右）に、女雛を右（向かって左）に飾っているのだが、現在の雛人形の広告を見ると、これとは逆に並べられているのが一般的となっている。その理由については、昭和天皇の即位の際に、天皇が中央に座り、その右側に皇后が座ったことから、雛段に並べる際にもこれを倣った（つまり従来とは逆になった）ためといわれるが、どちらが正しいとは必ずしも決まっていないようである。

いずれにせよ、過去とは生活習慣が大きく変わってしまった、あたかも別の国になってしまったかのような現代の日本でも、正月が明ければパートでは雛人形の大売出しがあり、テレビでは雛人形のCMがひっきりなしに流される。女の子が生まれた家では、豪華な段飾りのものにせよ、ごく小さなミニチュアのものにせよ、大半の家で

雛人形を飾って祝う。古代に起源を持ち、江戸時代に一般化した習俗が、今も大人も子どもも楽しみにしているというのは、大変嬉しく、またほほえましいことであると思う。

付言。豪華な段飾りの雛人形は全国各地でも見られるが、昔ながらの製法で作られる郷土玩具の雛人形が、今も全国各地に残っている。代表的なものとしては、福島県の三春人形、山形県の相良人形、京都府の伏見人形、広島県の三次人形などがあるが、それぞれに個性があつて面白い。また、冒頭に触れた鳥取の流し雛で、小さな紙雛を十組並べて竹の串で挟んだもの（元は玩具屋が人形を輸送した際の姿といわれる）は、小指の先ほどの小さな顔と赤い和紙の衣装の並ぶ姿がなんとも可憐で美しく、大変に印象深いものである。

参考 斎藤良輔著「ひな人形」

（昭和五十年 法政大学出版局）

（東京民藝協会会員）

たくみ歳時記

裂織の袋物 ―うぶくるみ園の仕事―

古布や端布を裂いて太い緯糸にし、織り上げる仕事を裂織といいますが、昔から日本や欧米の農村で広く行われた仕事です。緯糸が布裂めが裂ですから厚みがあつて温かく、それに洗い晒してあるから肌ざわりが良いのです。

欧米ではカーペットや卓布などのほかフィンランドでは起毛加工して断熱



裂織のリュックサック(左)と手さげカバン

性を増したコートが有名です。

日本でも近年裂織が盛んで多くのすぐれた作家がおられますが、今回ご紹介するのはたくみとも縁の深い西宮の公文知洋子さんの指導された作品です。

山口県宇部にある知的障害者のための

授産施設うぶくるみ園での仕事で、はじめは花瓶敷などを作っていました。が次第に腕を上げ、今では写真の品のようになかなか見事なものを作ります。色、風合い、仕立ていずれも良く、さすがが公文先生のご指導の賜物と思えますが、何より作り手たちが楽しく、喜びをもって仕事をしているからなのでしょう。

写真右から(価格は税込み)

- 手さげカバン 二二、一〇〇円
- リュックサック 二五、二〇〇円
- ほかにポシェット(二二、二二五円)などがあります。

あとがき

昨年の晩秋のある日、柚木沙弥郎氏(女子美大元学長)が来られた折り、置いてあつた昭和二十九年十一月号の月刊たくみ(リーチ特集号)を手にとられ、「このたくみの題字は、白崎君に頼まれて僕が描いたのだよ。」といわれ、恐縮してしまつた。じつは芹沢銈介先生のデザインとばかり思い込んでいたのである。

今は亡き白崎俊次氏は二十九年三月の東京民藝協会発足時から、たくみを足場にして協会の事務と会誌編集を手がけ、たくみ、民藝、民芸手帖とタイトルが変わつたなか、名編集者として会員に親しまれたのであつた。

復刊「たくみ」の題字も、当初の柚木先生のそれを使用していること、あらためて感謝申し上げます。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四―二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)